

I. 小児歯科そして成育歯科医療へ

いなみ矯正歯科 居波 徹



略 歴

1976年3月：愛知学院大学歯学部 卒業
1976年4月：愛知学院大学歯学部 歯科矯正学講座 専科専攻生
1977年4月：愛知学院大学歯学部 歯科矯正学講座 助手
1981年4月：いなみ矯正・小児歯科クリニック開院
1991年～2001年：レベルアンカレッジシステムコンサルタント
1993年6月：いなみ矯正歯科開院
2005年4月～2007年3月：日本舌側矯正歯科学会（JLOA）会長
2006年6月 Aldo Carano Award at the 6th ESLO
2008年4月～2012年3月：一般社団法人日本矯正歯科学会理事
2010年4月～2012年3月：世界舌側矯正歯科学会（WSLO）事務局長
2010年8月～ 愛知学院大学歯学部講師（非常勤）
2012年4月～ 公益社団法人日本矯正歯科学会常務理事（診査部門統括）
2012年4月～ 公益社団法人日本矯正歯科学会専門医委員会委員長
2013年12月～ 愛知学院大学歯学部歯科矯正学講座臨床教授

公益社団法人日本矯正歯科学会 認定医、専門医
日本舌側矯正歯科学会 認定医

「夢のある小児歯科を目指して」というテーマでお話しさせて頂く機会を得て光栄です。今から38年前、当時愛知学院大学歯学部小児歯科の長坂助教授に「将来、小児歯科をしたい」と夢を語りました。すると、先生は「それなら、隣の教室の宮原助教授にお願いしなさい」というお返事でした。つまり、まず「咬合の育成」を勉強してからという事でした。当時は「ムシ歯の洪水」の時代でしたので、週に一回は小児歯科専門医のところでお小児歯科治療の訓練を受けました。5年間矯正歯科学教室に在籍し、33年前に「いなみ矯正・小児歯科クリニック」を開業しました（1981）。

北海道で開催された第25回日本小児歯科学会（1987）で「咬合育成」の演題で乳歯のアンキローシスで萌出困難となった小臼歯の牽引誘導の症例報告をした時に、嘉ノ海龍三と出会いました。仲間を募り『咬合誘導研究会』をこの九州の地で立ち上げました（1996）。小児歯科と矯正歯科の融合を目指して、主に咬合誘導・咬合育成に主眼を置いていましたが、様々な議論の結果、最終的には健全な口腔機能の育成を通じて、広く次世代までも継続するセルフケアを支援する医療体系の開発について研究するという視点から、咬合誘導研究会の名称を「成育歯科医療研究会」と改称することになりました。（2004）

成育歯科医療の概念を追求しながら、片一方ではいわゆる専門的な『矯正歯科治療』を追い求めました。今年3月まで、日本矯正歯科学会の常務理事として審査部門を統括し、専門医委員会委員長として各種審査を行わせて頂きました。また、長年温めてきた「リングブラケット矯正治療」も本格的に行う事としました。いま何故『リングブラケット矯正法』なのでしょう。成長期の患者さんの、カリエス罹患率が従来のラビアル矯正の1/5に軽減すると言われ、吹奏楽が可能で、スポーツ外傷の低減等多くの特徴を持っていますので、今後若年者（中高生）のラビアル矯正に取って代わって行くと考えています。（2008）

さて、33年前に人口十数万人の京都市隣接の宇治市にて「いなみ矯正・小児歯科クリニック」を開業して

間もなく、数名の歯科医師と勉強会を始めました。口腔外科専攻、補綴専攻、歯周病専攻等プロフェッショナル志向型の先生達と様々な症例の検討会を定期的に行いました。約10年後、その中に小児歯科専攻の先生が加わり、自分の医院の小児歯科の患者さんをそのまま引き継ぎして頂きました。その様な機会が無ければ小児歯科を継続していたと思います。(1993)。つまり、対象を青年期まで延ばして、永久歯列完了までの成育歯科医療を展開していたと思います。また、公衆歯科担当や障がい者歯科医療のメンバーでもありましたので、そちらの方面にも専門性を広げたかもしれません。いずれにしても、従来の「小児歯科」の枠の中だけで歯科医療を展開してはいなかったと思います。すなわち、地域の府市民の口腔の健康の維持増進を主眼にして、いかに自分のプロフェッションを生かしていくかを重要視していく事が大切と感じていました。その様なわけで、自分の目指していた「小児歯科」は小児を取り巻く総合的な歯科医療ではないかと思ひ至り、いわゆる「成育歯科医療」にそのプロフェッションを研ぎ澄ますことが自分の進むべき方向と信じました。

今回、日本小児歯科学会の九州地方会の先生方に、成育歯科医療のなかで顎顔面の歯科治療に関する「二期治療の意味」や「不正咬合の予防」について、問題提起しながら「夢のある小児歯科をめざす」について少しでもお話し出来ればと考えております。